

資料室だより 121

本科 29 期生の寄附金により、下記の叢書楽譜を購入しました。感謝して報告いたします。

Corpus Mensurabilis Musicae, 95:

Early sixteenth century sacred music from the Papal chapel

まず、**Corpus Mensurabilis Musicae** という叢書名は定量音楽大全と言います。定量記譜法で書かれた音楽を網羅しようという学問的校訂楽譜です。デュファイやマシヨーのような作曲家の個人全集もこのなかに含まれます。

そして今回購入した 95 巻はタイトルにある通り、16 世紀の教皇庁礼拝堂の典礼音楽を所収しているものです。16 世紀初期ということで年代的には 1515 年から 40 年の間の作品ですから、まだ宗教改革もトリエント公会議も行われておりません。フランドル楽派の隆盛と反宗教改革のはざまの時期です。

作者不詳の作品が多いですが、名前がわかっても音楽史的にはなじみのない名前です。この時代に教皇庁で歌われていた典礼を知るという意味では大変興味深いものがあります。受難の朗唱もヨハネ、マタイ共に所収されています。死者のための典礼ではミサ固有文、通常文は多声で作曲され、セクエンツィアの **Dies irae** だけはグレゴリオ聖歌のまま歌われるように単旋律が挿入されています。

興味深いのは **Missa de beata Virgine** のような聖母ミサ (**cum júbilo**) を定旋律としているミサ曲にはグローリアのなかに聖母に関するトロープス(挿入された句)がふんだんにとりいれられていることです。また、本来のグローリアのテキストはグレゴリオ聖歌で歌い、トロープスの部分を多声にしているミサもあります。

また、理由はわかりませんがミサ曲やモテットに交じって若干の世俗曲(シャンソン、マドリガーレ)も含まれています。まぎれこんでしまったのではなく別のソースから書き写されて収められたのでなんらかの歌う機会があったのだと思われます。

なお、さらに興味ある方には、すでに資料室が所蔵する **Papal music and musicians in Medieval and Renaissance Rome** (Ed by Richard Sherr, Oxford)がお勧めです。

教皇庁の音楽の諸相が歴史の流れの中で様々に考察されています。サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノの **Codex 59**—パレストリーナの作品のオリジナル楽譜の目録も含まれており、資料的に有用な情報があります。

(杉本ゆり 記)